鮑照「擬行路難」の制作意図

佐藤大志

一

従来、鮑照の「擬行路難」十八首は、藤井守氏、向島成美氏によって、一時の作ではなく時間的にある程度の幅をもって作られているという説が主張されていた。[1] しかし、近年、中森健二氏が「擬行路難」十八首の構成について考察をし、一時の連作として認められた。[2] 中森氏はその論文の中で十八首の構成について、まず女性の嘆きを歌う作品群と、その他の作品群（自分の嘆きを歌う作品群と、物語的に女性と男性の悲しみを歌う作品群）に分けて考察をし、「擬行路難」は鮑照自身の心情の揺れ動きを描くことを中心とし、嘆く女性を歌う作品群が移り変わる作者の思いを述べる導入的役割をしているとして、十八首の構成を見いだしている。この「擬行路難」を一時の作として、十八首の構成をまとめられた説は注目に値するが、しかし、氏の説についてはなお検討の余地があるように思える。すなわち、第一点は、男性を思って嘆く女性を歌う作品群において、女性の嘆きが次第に深まっているとされるが、女性の嘆きは何故深まっていっているのかということ、また第二点は、作者自身の嘆きを歌う作品群は更に細かく分類されるべきであり、そのためこの作品群の分析が不十分であるということが挙げられる。すなわち、十八首全体として、それぞれの作品がどのように変化して、その変化がなぜ起こっているのかということが、明確にされていないのである。

本論文では、中森氏の指摘に従って、「擬行路難」十八首を一時の作として考え、十八首の相互の関連性をより明確に分析してゆき、その分析を基に「擬行路難」十八首の制作意図と作者の主張を探ることにする。そうして、最後に「擬行路難」十八首の制作年代について私見を述べたい。

二

内容による作品群の分類は、以下の通りである。

A、嘆く男に対して詠む　①・⑪・⑫
B、男性を思って嘆く女性を詠む　②・③・⑧・⑨・⑫
b、故郷を離れた男性を詠む　⑬・⑭

C、人生の困難を詠む　④・⑤・⑥・⑦・⑮・⑯・⑰
D、聞き手に呼びかける　⑱

Bの「男性を思って嘆く女性を詠む」作品の分類については、ほぼ中森氏と同じであるが、[3]中森氏が「物語的な巧みな構成をもつ」とする作品に分類している〈其十二〉〈其十三〉〈其十四〉を、私は〈其十二〉をBの作品に入れ、〈其十三〉〈其十四〉をbの「故郷を離れた男性を詠む」作品とした。また、中森氏が「鮑照自身の嘆きを歌う」とする作品を、Aの「嘆く男に対して詠む」作品と、Cの「人生の困難を詠む」作品と、Dの「聞き手に呼びかける作品」の三つに分類した。このように分類したことについてはそれぞれの作品の内容を分析する中で説明していくこととする。

さて、このように分類すると、Aの作品が最初と中央にあり、そして、Dの「聞き手に呼びかける」という作品が最後に配されている[4]ことが分かる。Aの作品とDの作品は、いずれも作者の呼びかけが行われている作品であり、最初と中央と最後に作者の呼びかけがあるのである。こうしてみると、この作者の呼びかけが「擬行路難」の制作意図と関係があるように考えられる。では、まずAの「嘆く男に対して詠む」作品の作者の呼びかけについて見てみよう。

其一

1　奉君金巵之美酒　君に奉ず　金巵の美酒
2　玳瑁玉匣之彫琴　玳瑁　玉匣の彫琴
3　七綵芙蓉之羽帳　七綵　芙蓉の羽帳
4　九華葡萄之錦衾　九華　葡萄の錦衾
5　紅顔零落歳将暮　紅顔　零落して歳は将に暮れんとす
6　寒光宛轉時欲沈　寒光　宛轉として　時は沈まんと欲す
7　願君裁悲且減思　願はくは君　悲しみを裁ち且つ思ひを減じ
8　聽我抵節行路吟　我が節を抵ちての行路吟を聽け
9　不見柏梁銅雀上　見ずや　柏梁・銅雀の上
10　寧聞古時清吹音　寧ぞ聞かん　古時　清吹の音

〈其一〉は、藤井、中森両氏が、十八首の総序的な役割を担っている作品だと既に指摘されている。この総序的役割を担うとされる〈其一〉は「我が節を抵ちての行路吟を聽け」という呼びかけが行われており、「擬行路難」が誰かの憂いを忘れさせる為に歌い始められたことを示している。単純に考えれば、この「誰かの憂いを忘れさせる為に歌う」ということが、「擬行路難」の制作目的となるであろう。続けて〈其十〉〈其十一〉を見てみる。

其十

1　君不見蕣華不終朝　君見ずや　蕣華は朝を終えず
2　須臾淹冉零落銷　須臾に淹冉として零落して銷ふる

3 盛年妖艶浮華輩　　盛年の妖艶　浮華の輩
4 不久亦當詣冢頭　　久しからずして亦た當に冢頭に詣るべし
5 一去無還期　　一たび去りて還る期無く
6 千秋萬歲無音詞　　千秋萬歲　音詞無し
7 孤魂煢煢空隴間　　孤魂　煢煢たり　空隴の間
8 獨魄徘徊遶墳基　　獨魄　徘徊して　墳基を遶る
9 但聞風聲野鳥吟　　但だ聞く　風聲　野鳥の吟
10 豈憶平生盛年時　　豈に憶はんや　平生　盛年の時
11 爲此令人多悲悒　　此が爲に人をして多く悲悒せしむ
12 君當縱意自熙怡　　君當に意を縱にし自ら熙怡すべし

其十一

1 君不見枯籟籜走階庭　　君見ずや枯籟　階庭に走るを
2 何時復青著故莖　　何れの時か復た青く故莖に著かん
3 君不見亡靈蒙享祀　　君見ずや　亡靈　享祀を蒙るを
4 何時傾杯竭壺罌　　何れの時か杯を傾け壺罌を竭くさん
5 君當見此起憂思　　君當に此を見て憂思を起こすべし
6 寧及得與時人爭　　寧ぞ時人と爭ふを得るに及ばんや
7 生人倏忽如絶電　　生人　倏忽として絶電の若し
8 華年盛德幾時見　　華年の盛德　幾時か見ん
9 但令縱意存高尚　　但だ意を縱にして高尚を存せしむ
10 旨酒佳肴相胥讌　　旨酒佳肴もて相胥に讌まん
11 持此從朝竟夕暮　　此を持ちて朝より夕暮を竟へん
12 差得亡憂消愁怖　　差得亡憂ひを亡れ愁怖を消すを得ん
13 胡爲惆悵不能已　　胡爲ぞ惆悵として已む能はざる
14 難盡此曲令君忤　　此の曲を盡くし　君をして忤らはしむること難し

〈其十〉は第十二句に「君當に意を縱にし自ら熙怡すべし」、〈其十一〉は第九・十句に「但だ意を縱にして高尚を存せしむ、旨酒佳肴もて相胥に讌まん」と相手に憂いを忘れて思うままに楽しみなさいという呼びかけが見られる。これは〈其一〉と同じ趣旨の呼びかけであり、やはり作者の呼びかけは誰かの憂いを忘れさせようとしているようである。このように、Aの「嘆く男に対して詠む」作品三首に見える、作者の呼びかけに着目すると、「擬行路難」十八首は「誰かの憂いを忘れさせる為に歌う」という制作意図があるようである。それでは、A以外の作品にもこの制作意図が伺えるのであろうか。

Bの「男性を思って嘆く女性を詠む」作品は、前半に〈其二〉〈其三〉〈其八〉〈其九〉と、場所を異にして二首連続して配され、後半に〈其十二〉が、Bの「故郷を離れた男性を詠む」作品の〈其十三〉〈其十四〉と共に、三首連続で配されている。前半の〈其二〉〈其三〉〈其八〉〈其九〉について、この四首は女性の嘆きを二つの方向から描いていると中森氏は指摘する。ここで言う女性の嘆きの二つの方向というのは、一つは遠く離れた男性を思って嘆くとい

うもので、もう一つは男性の心変わりを嘆くというものである。また、その女性の悲しみは〈其二〉〈其三〉から〈其八〉〈其九〉へとより深まっていると中森氏は指摘している。前半の「女性の嘆きを詠む」作品については、私も中森氏の指摘と全く同じ意見である。では、女性の嘆きはどのように変化しているのか、また、女性の嘆きが何故深まったのか。そのことは、Cの作品との関連によって明確になる。

Cの作品は、人生の困難を詠んでおり、〈其四〉〈其五〉〈其六〉〈其七〉〈其十五〉〈其十六〉〈其十七〉が、それに相当する。配置されている位置を見ると、前半ではBの「女性の嘆きを詠む」作品に挟まれる形で、〈其四〉〜〈其七〉まで四首連続して配されており、後半ではBの作品の後に〈其十五〉〜〈其十七〉まで三首連続で配されている。まず、前半の四首から見てみる。

其四

1 瀉水置平地　水を瀉いで平地に置けば
2 各自東西南北流　各々自ら東西南北に流る
3 人生亦有命　人生　亦た命有り
4 安能行歎復坐愁　安んぞ能く行きては歎じ復た坐しては愁へん
5 酌酒以自寛　酒を酌んで以て自ら寛やかにせんとす
6 舉杯斷絶歌路難　杯を舉げ斷絶して路難を歌う
7 心非木石豈無感　心　木石に非ざれば　豈に感無からんや
8 呑聲躑躅不敢言　聲を呑んで躑躅して敢て言はず

〈其四〉は、運命が思うままに行かないことを憂う作品である。その憂いは、第一・二句の「水を瀉いで平地に置けば、各々自ら東西南北に流る」に表れている。この言葉の意味は、水自体には違いはないが、それがひとたび地に注がれると同じ方向には進まないということだが、この考えは〈其二〉〈其三〉の女性の嘆きを詠む作品によって導き出されている。

其二

1 洛陽名工鑄爲金博山　洛陽の名工　鑄て金の博山を爲る
2 千斲復萬鏤　千斲し　復た萬鏤し
3 上刻秦女攜手仙　上には秦女　手を仙に攜ふるを刻む
4 承君清夜之歡娛　君が清夜の歡娛を承け
5 列置幃裏明燭前　幃裏　明燭の前に列ね置く
6 外發龍鱗之丹綵　外には龍鱗の丹綵を發し
7 内含蘭芬之紫烟　内には蘭芬の紫烟を含む
8 如今君心一朝異　如今　君が心　一朝にして異なる
9 對此長歎終百年　此に對して長歎し百年を終う

其三

1 璇閨玉墀上椒閣　璇閨玉墀椒閣に上れば
2 文窗繡戸垂綺幕　文窗　繡戸　綺幕を垂る
3 中有一人字金蘭　中に一人有り　字は金蘭
4 被服纖羅蘊芳藿　纖羅を被服し芳藿に蘊まる
5 春燕差池風散梅春燕　差池として風は梅を散らし
6 開幃對景弄禽爵　幃を開き景に對して禽爵を弄す
7 含歌攪涕恒抱愁　歌を含み涕を攪りて恒に愁ひを抱く
8 人生幾時得爲樂　人生　幾時か樂しみを爲すを得ん
9 寧作野中之雙鳧　寧ろ野中の雙鳧と作るも
10 不願雲間之別鶴　雲間の別鶴たるを願はず

この〈其二〉〈其三〉は、離れ離れになった男性を思って嘆く女性の思いが詠まれており、〈其四〉はこの二首から第一・二句が導き出しており、第三・四句では「人生また命有り、安ぞ能く行きては歎じ復た坐しては愁へん」と、運命は元々定められており、運命がままならぬことを思って、嘆き憂えることは意味のないことだと主張するのである。しかし、この第三・四句の主張は、第七・八句では「心　木石に非ざれば豈に感無からんや、聲を呑んで躑躅して敢て言はず」と早くも揺らいでしまう。憂いを抱くことは益のないこと思っても、憂いは起こってしまうのである。そして、続く〈其五〉〈其六〉は儘ならぬ運命に対する憂いを忘れようとする方向に向かう。

其五

1 君不見河邊草　君見ずや　河邊の草
2 冬時枯死春滿道　冬時には枯死するも春には道に滿つるを
3 君不見城上日　君見ずや　城上の日
4 今暝沒山去　今暝　山に沒し去るも
5 明朝復更出　明朝　復た更に出づるを
6 今我何時當得然　今　我何れの時にか當に然るを得べけんや
7 一去永滅入黃泉　一たび去れば永滅し黃泉に入る
8 人生苦多歡樂少　人生は苦しみ多くして歡樂少きも
9 意氣敷腴在盛年　意氣は敷腴し盛年に在り
10 且願得志數相就　且つ願はくは志を得て數々相ひ就り
11 牀頭恒有酤酒錢　牀頭に恒に酤酒の錢有るを
12 功名竹帛非我事　功名竹帛　我が事に非ず
13 存亡貴賤委皇天　存亡貴賤　皇天に委ねん

其六

1 對案不能食　案に對して食ふこと能はず
2 拔劍擊柱長歎息　劍を拔いて柱を擊ちて長く歎息す
3 丈夫生世能幾時　丈夫世に生くること　能く幾時ぞ
4 安能蹀躞垂羽翼　安んぞ能く蹀躞して羽翼を垂れんや
5 棄置罷官去　棄置して官を罷め去り

6 還家自休息　家に還りて自ら休息せん
7 朝出與親辭　朝に出でて親と辭し
8 暮還在親側　暮に還りて親の側に在り
9 弄兒牀前戲　兒の牀前に戯れるを弄し
10 看婦機中織　婦の機中に織るを看る
11 自古聖賢盡貧賤　古より聖賢は盡く貧賤なり
12 何況我輩孤且直　何ぞ況んや　我輩の孤にして且つ直なるをや

この二首で表明される儘ならぬ運命とは、意を得て官に就くことができないことであり、〈其五〉の第十二・十三句では天に運命を任そうと言い、〈其六〉の第十一・十二句では、古の聖賢も同じ苦しみを味わった、自分一人ではないのだと言って、心の安定を図ろうとしている。しかし、それは根本的な解決ではなく、一時的に自分の気持ちを緩和するだけのものであり、そのため、〈其七〉では第一句から「愁思　忽ちにして至り」と再び憂いが襲ってきている。

其七

1 愁思忽而至　愁思　忽ちにして至り
2 跨馬出北門　馬に跨りて北門を出づ
3 舉頭四顧望　頭を舉げて四もに顧望すれば
4 但見松柏園　但だ松柏の園を見るのみ
5 荊棘欝蹲蹲　荊棘は欝として蹲蹲たり
6 中有一鳥名杜鵑　中に一鳥有り　名は杜鵑
7 言是古時蜀帝魂　是れ古時の蜀帝の魂と言ふ
8 聲音哀苦鳴不息　聲音は哀苦にして鳴きて息まず
9 羽毛憔悴似人髡　羽毛は憔悴して人の髡するに似る
10 飛走樹間啄蟲蟻　樹間に飛び走りて蟲蟻を啄む
11 豈憶往日天子尊　豈に往日の天子の尊きを憶はんや
12 念此死生變化非常理　此を念ふに死生變化は常の理に非ず
13 中心惻愴不能言　中心　惻愴として言ふ能はず

〈其七〉は、杜鵑に変わった蜀王の死後の無残な姿を描くことによって、「死生変化」の無常を訴えているのだが、ここで起こった憂いは、〈其五〉〈其六〉の意を得られない憂いに、さらに意を得てもそれがいつまでも続くものではないという人生のはかなさに気づいた憂いも加わっているのである。この〈其四〉から〈其七〉への憂いの進行は〈其七〉の第八句の「言ふ能はず」という言葉に表れている。〈其四〉の第八句では「敢えて言はず」と、まだ行路の難について語る心の余裕が見えるが、〈其七〉ではその余裕は消えて、「言う能はず」と語ることができなくなるまでになっているのである。そして、二つの憂いを抱えて、Cの「人生の困難を詠む」作品は途切れ、再び「女性の嘆きを詠む」、〈其八〉〈其九〉が置かれる。

其八

1 中庭五株桃
2 一株先作花
3 陽春沃若二三月
4 從風簸蕩落西家
5 西家思婦見悲惋
6 零涙沾衣撫心歎
7 初我送君出戸時
8 何言淹留節迴換
9 牀席生塵明鏡垢
10 纖腰瘦削髪蓬乱
11 人生不得恒稱意
12 惆悵徙倚至夜半

中庭　五株の桃
一株　先づ花を作す
陽春　沃若たる二三月
風に従ひて簸蕩し西家に落つ
西家の思婦　見て悲惋す
零涙　衣を沾して心を撫して歎く
初め我　君を送りて戸を出づる時
何ぞ言はん淹留して節の迴換せんと
牀席は塵を生じて明鏡は垢れ
纖腰は瘦削して髪は蓬乱す
人生　恒に意に稱ふことを得ず
惆悵として徙倚し　夜半に至る

其九

1 蘗剉染黄絲
2 黄絲歴亂不可治
3 我昔與君始相値
4 爾時自謂可君意
5 結帶與我言
6 死生好惡不相置
7 今日見我顔色衰
8 意中索寞與先異
9 還君金釵玳瑁簪

蘗を剉りて黄絲を染む
黄絲は歴亂して治むべからず
我昔　君と始めて相値ひて
爾の時　自ら謂ふに君が意に可ふ
帶を結びて我と言ふ
死生　好惡　相置かず
今日　我が顔色の衰ふを見て
意中索寞として先と異なる
君に金釵玳瑁の簪を還さん

10 不忍見之益愁思　之を見て愁思を益すに忍びず

〈其八〉〈其九〉は、〈其七〉が「言う能はず」と、これ以上人生の困難を詠むことができなくなって結ばれたのを受けて登場し、再び女性の嘆きを描き始めている。そしてこの女性の嘆きは、〈其四〉～〈其七〉で増していった憂いに応ずるように、〈其二〉や〈其三〉よりも女性の悲しみを深めており、それは、女性の嘆く様子を具体的にしていることに表れている。また、〈其八〉〈其九〉には、〈其八〉の第七句～第十二句、〈其九〉の第七・八句に見られるように〈其二〉〈其三〉には見られなかった時の移り変わりを嘆くという女性の思いが加わっており、〈其七〉で新たに加わった人生のはかなさを思う憂いとつながっている。このように〈其八〉〈其九〉の「女性の嘆きを詠む」作品は、〈其四〉～〈其七〉の「人生の困難を詠む」作品の内容を受けて、〈其二〉〈其三〉よりも女性の嘆きが深められていると考えられるのである。

また〈其八〉〈其九〉は、〈其二〉〈其三〉と同じように、続く〈其十〉に影響している。〈其七〉では「言う能はず」の状態であったのが、〈其八〉〈其九〉の嘆く女性が詠まれることによって、人生の元々ままならぬことが示されたので、〈其十〉では再び憂いを忘れよという方向に向かう。〈其十〉〈其十一〉は、Aの「嘆く男に対して詠む」作品なのだが、その中に詠まれる主張は、Cの「人生の困難を詠む」作品と同じであり、Bの作品とCの作品とも関連して

いるのでここで再び取りあげる。

〈其十〉で忘れようとする憂いとは、〈其七〉で「言う能はず」の状態にさせられた人生のはかなさであり、その人生のはかなさを〈其十〉では「蕣華」や「盛年の妖艶　浮華の輩」などの例を挙げて具体的に示し、第十一句に「此が為に人をして多く悲悒せしむ」と、人生のはかなさを思って悲しむのは当然のこととして認める。そして、第十二句では「君當に意を縱にし自ら熙怡すべし」と、人生のはかなさを憂えることなく思うままに生きよと呼びかけるのである。〈其七〉では、第二の憂いが突然沸きあがったために解決の糸口を掴めることなく、「言う能はず」という状況に至ったが、〈其十〉では〈其八〉〈其九〉の女性の嘆きによって、人生とはもともと儚く困難なものだから憂えても仕方がないということが示されたので、ここで初めて、その憂いを忘れて思うままに生きよという主張が現れるのである。その主張は〈其十一〉にも第九句に「但だ意を縱にして高尚を存せしむ」と繰り返され、第十句には「旨酒佳肴もて相胥に讌まん」と酒を飲むことによって憂いを消すという主張も表れてくるようになるのである。

しかし、〈其十一〉の第十三・十四句では、「胡爲ぞ惆悵として已む能はざる、此の曲を盡くし　君をして忤らわしむること難し」と、相手が作者の主張に納得せずにまだ憂えている様子が描かれている。ここまで、相手の憂いの原因である人生の困難に対して、作者はそれを忘れさせようとしてきたのだが、相手は作者の主張にまだ納得しようとしないので、「行路吟」は〈其七〉と同じように、ここで途絶えてしまう。そこで、三たび「女性の悲しみを詠む」作品〈其十二〉～〈其十四〉が登場するのである。

其十二

1　今年陽初花滿林　　今年の陽初　花は林に滿ち
2　明年冬末雪盈岑　　明年の冬末　雪は岑(みね)に盈つ
3　推移代謝紛交轉　　推移代謝は紛として交(こもご)も轉ずるも
4　我君邊戍獨稽沈　　我が君は邊戍して獨り稽沈す
5　執袂分別已三載　　袂を執りて分別し　已に三載
6　邇來淹寂無分音　　邇來　淹寂として分音無し
7　朝悲慘慘遂成滴　　朝に悲しみ　慘慘として遂に滴を成し
8　暮思逵逵最傷心　　暮に思ひて逵逵として最も心を傷ましむ
9　膏沐芳餘久不御　　膏沐芳餘は久しく御せず
10　蓬首亂鬢不設簪　　蓬首亂鬢　簪を設けず
11　徒飛輕埃舞空帷　　徒(いたづら)に輕埃を飛ばし空帷に舞はしめ
12　粉筐黛器靡復遺　　粉筐黛器　復た遺る靡し
13　自生留世苦不幸　　生れて世に留まりてより　不幸に苦しみ
14　心中惕惕恒懷悲　　心中惕として恒(つね)に悲しみを懷く

1 春禽旦暮鳴　　春禽　旦暮に鳴く
2 最傷君子憂思情　　最も君子が憂思の情を傷ましむ
3 我初辭家從軍僑　　我初め家を辭し軍僑に從ひ
4 榮志溢氣干雲霄　　榮志溢氣は雲霄を干す
5 流浪漸冉經三齡　　流浪漸冉として三齡を經
6 忽有白髮素髭生　　忽ち白髮有りて素髭生ず
7 今暮臨水拔已盡　　今暮　水に臨みて拔きて已に盡く
8 明日對鏡復已盈　　明日鏡に對すれば復た已に盈つすも
9 但恐羈死爲鬼客　　但だ恐る　羈死して鬼客と爲り
10 客思寄滅生空精　　客思　寄滅して空精を生ずるを
11 每懷舊鄉野　　每に舊鄉の野を懷ひ
12 念我舊人多悲聲　　我が舊人の悲聲多きを念ふ
13 忽見過客問何我　　忽ち過客を見る　我に何をか問ふ
14 寧知我家在南城　　寧ぞ我が家の南城に在るを知らん
15 答云我曾居君鄉　　答へて云ふ　我曾て君が鄉に居す
16 知君遊宦在此城　　君の遊宦して此の城に在るを知る
17 我行離邑已萬里　　我行きて邑を離れること已に萬里
18 今方羈役去遠征　　今方に羈役し　去りて遠く征かんとす
19 來時聞君婦　　來る時　君が婦の
20 閨中孀居獨宿有貞名　　閨中に孀居して獨り宿し貞名有るを聞く
21 亦云朝悲泣閑房　　亦云ふ　朝に悲しみ閑房に泣き
22 又聞暮思淚沾裳　　又聞く　暮に思ひて淚は裳を沾す（うるお）と
23 形容憔悴非昔悅　　形容憔悴して昔の悅びあるに非ず
24 蓬鬢衰顏不復妝　　蓬鬢　衰顏　復た妝せず
25 見此令人有餘悲　　此を見れば人をして餘悲有らしむ
26 當願君懷不暫忘　　當に君の懷ひて暫しも忘れざるを願ふべし

其十四

1 君不見少壯從軍去　　君見ずや少壯にして軍に從ひ
2 白首流離不得還　　白首流離して還るを得ざるを
3 故鄉窅窅日夜隔　　故鄉　窅窅として日夜隔り
4 音塵斷絕阻河關　　音塵　斷絕して河關に阻まる
5 朔風蕭條白雲飛　　朔風　蕭條として白雲飛び
6 胡笳哀急邊氣寒　　胡笳　哀しく急にして邊氣寒し
7 聽此愁人兮奈何　　此を聽きて人を愁えしむること奈何せん
8 登山遠望得留顏　　山に登りて遠望して顏を留むるを得んや
9 將死胡馬跡　　將に胡馬の跡に死せんとす
10 寧見妻子難　　寧ぞ妻子の難（なん）きを見ん
11 男兒生世轗軻欲何道　　男兒　世に生まれて轗軻　何を道（い）はんと欲する
12 綿憂摧抑長歎　　憂ひを綿（つら）ねて摧抑して長歎す

この〈其十二〉～〈其十四〉の三作品について、中森氏はこれらは前半の女性の嘆きを読む作品（②③⑧⑨）とは別に、物語的な巧みな構成をもって独立しているとしている。しかし、この三作品は前半で見られた女性の嘆きの二つの方向の一つである「離れた男性を思う女性の嘆き」が描かれており、前半では女性の嘆きを一方的に描いていたのを、後半では相手の男性も持ち出して、両方からその嘆きをより明確にしている作品であるので、この三作品はBの「女性の嘆きを詠む」作品と同じ性質であると考えられる。

〈其十二〉は、前半より男性を思って嘆く女性の嘆く姿がさらに具体的になり、悲しみも深まっている。そして、前述のごとく〈其十三〉〈其十四〉には前半の「女性の嘆きを詠む」作品（②③⑧⑨）には見られなかった、女性が思う男性が現れる。〈其十三〉〈其十四〉に登場する男性が、何故〈其十二〉に登場する女性が思っている相手なのかという事については、中森氏が既に論じておられることなので、ここでは省略させていただく。結局、この女性の嘆きを読む三作品も、前半と同じように人生の困難に苦しむのは君一人ではないということ、人生は元より困難なものなのだということを示す具体例として使われているようである。そうして〈其十二〉～〈其十四〉を受けて〈其十五〉～〈其十七〉にCの「人生の困難を詠む」作品が登場する。

其十五

1 君不見柏梁臺
2 今日丘墟生草莱
3 君不見阿房宮
4 寒雲澤雉栖其中
5 歌妓舞女今誰在
6 高墳壘壘滿山隅
7 長袖紛紛徒競世
8 非我昔時千金躯
9 隨酒逐樂任意去
10 莫令含歎下黄壚

君見ずや　柏梁臺
今日丘墟となり草莱を生ずるを
君見ずや　阿房宮
寒雲　澤雉　其の中に栖むを
歌妓舞女　今誰か在る
高墳　壘壘として山隅に滿つ
長袖　紛紛として徒らに世に競ふ
我は昔時　千金の躯なるに非ず
酒に隨ひ樂しみを逐ひて意に任せて去らん
歎きを含んで黄壚に下らしむ莫かれ

其十六

1 君不見冰上霜
2 表裏陰且寒
3 雖蒙朝日照
4 信得幾時安
5 民生故如此
6 誰令摧折強相看
7 年去年來自如削
8 白髪零落不勝冠

君見ずや　冰上の霜
表裏　陰にして且つ寒し
朝日の照らすを蒙ると雖も
信に幾時の安らぎを得ん
民生　故より此の如し
誰か摧折して強ひて相看せしめん
年去り年來りて自ら削るが如し
白髪　零落して冠に勝へず

其十七

1 君不見春鳥初至時　君見ずや　春鳥初めて至りし時
2 百草含青俱作花　百草　青を含んで俱に花を作す
3 寒風肅索一旦至　寒風　肅索として一旦にして至れば
4 竟得幾時保光華　竟に幾時か光華を保つことを得んや
5 日月流邁不相饒　日月流邁して相饒やかならず
6 令我愁思怨恨多　我をして愁思して怨恨多からしむ

〈其十五〉は、〈其十〉〈其十一〉の「意を縦にして」生きてゆきなさいという主張を受けて、〈其十一〉においてまだ憂いに沈んでいた男に対してもう一度、憂いを忘れてはどうかと呼びかけるかのように結ばれる。しかし、〈其十六〉〈其十七〉になると、憂いを忘れるという主張は現れなくなる。〈其十六〉の結びの第七・八句は「年去り年來りて自ら削るが如し、白髪　零落して冠に勝へず」、〈其十七〉の結びの第五・六句は「日月流邁して相饒やかならず、我をして愁思して怨恨多からしむ」と二首ともに人生の困難を詠んだあとに、憂い嘆く思いを素直に吐露しようとしているかのように結ばれている。また、この三作品の句数を見てみると、〈其十五〉は十句、〈其十六〉は八句、〈其十七〉は六句と次第に句数は短くなって行き、感情の高ぶりを表しているかのようである。結局のところ、この男性の思いを詠む三首の作品は、初めこそ〈其十〉〈其十一〉の憂いを忘れようとする主張を受け継ごうとしたが、最後には忘れようとすることを断念し、素直に苦しみを吐露して終わっている。そして、人生の困難を憂い嘆く思いは、〈其十八〉に結論が委ねられるのである。

其十八

1 諸君莫歎貧　諸君　貧を歎くこと莫かれ
2 富貴不由人　富貴は人に由らず
3 丈夫四十強而仕　丈夫四十　強にして仕ふ
4 余當二十弱冠辰　余は二十　弱冠の辰に當る
5 莫言草木委大雪　言ふ莫かれ　草木は大雪に委むと
6 會應蘇息遇陽春　會ず應に蘇息して陽春に遇ふべし
7 對酒敍長篇　酒に對して長篇を敍べ
8 窮途運命委皇天　窮途の運命は皇天に委ぬ
9 但願樽中九醞滿　但だ樽の中に九醞の滿つるを願い
10 莫惜牀頭百個錢　牀頭百個の錢を惜しむ莫し
11 直須優游卒一歲　直だ須く優游して　一歲を卒ふべし
12 何勞辛苦事百年　何ぞ勞して辛苦し　百年を事とせんや

〈其十八〉は、〈其十七〉までとは全く違った雰囲気の作品であり、〈其十七〉までに歌われたような人生の困難さを歌う、暗いイメージは見られないために、十八首中で特異な作品に見える。しかし、私は〈其十八〉の内容は〈其

十七〉までの流れを引き継ぎ、結論的役割を果たしていると考える。

〈其十八〉は、冒頭から「諸君　貧を歎くこと莫かれ、富貴は人に由らず」とまず、第一の憂い、意を得られない不遇の人生を嘆くことの益のないことを強く主張し、呼びかけることから始められる。そうして、次に第二の憂いである人生のはかないことを嘆く憂いについて歌われる。第五・六句では、人生のはかなさ、人生の困難は避けることのできないことと認めたうえで、いつかは訪れるであろう「陽春」の時を待つとし、第八句では「窮途の運命は皇天に委ぬ」と言い、第十一・十二句では「直だ須く優游して一歳を卒ふべし、何ぞ勞して辛苦し　百年を事とせんや」と言い、人生の難に憂いを抱くことなく、悠々と暮らそうとするのである。これらの主張は「若さに希望を託して悠々と暮らす」という楽観的な考えに支えられている。そして、この考えが全面に表れているので、〈其十八〉は十八首の中で特殊な存在と見られるのである。しかし、第八句の「窮途の運命は皇天に委ぬ」は、〈其五〉の第十三句の「存亡貴賤　皇天に委ねん」と同じ主張であり、第十一・十二句の「直だ須く優游して　一歳を卒ふべし、何ぞ勞して辛苦し　百年を事とせんや」は、〈其十〉〈其十一〉に見える「意を縱に」という主張と同じあり、〈其十八〉に見られる主張は、他の作品にも見えるのである。つまり、「擬行路難」十八首は、一貫して同じ主張を繰り返しており、それが〈其十八〉で己の若さに支えられて、全面的に表明されているだけであり、〈其十八〉は十八首中で突出した特殊な作品ではないのである。

さて、これまでに述べてきた十八首それぞれの関連を簡単に示すと左のようになる。

☆其一《A》
総序的役割。人生の困難を憂えるある男に対して、その憂いを忘れさせるために歌い始められる。

☆其二・其三《B》
女性の嘆きから運命のままならぬさまをあげ、〈其四〉の主張を導き出す。

☆其四・其五・其六・其七《C》
初めは第一の憂い（意を得られる憂い）を忘れようと努力する（其四～其六）。しかし、新たに第二の憂い（人生のはかないことに対する憂い）が加わり、「不能言」（其七）の状態に陥る。

☆其八・其九《B》
「不能言」（其七）の状態を受けて、再び嘆く女性を詠む。〈其四〉～〈其七〉において憂いが増しているので、それに応じるように女性の嘆く様子は詳しく描かれ、悲しみが深くなる。人生は元々ままならず、困難なものだという主張を導き出し、また人生の困難に苦しむのはあなた（自分）一人ではないと言う思いも抱かせる。

☆其十・其十一《A》
〈其八〉〈其九〉を経て、「不能言」（其七）の状態から抜

け出し、人生のはかなさを憂えることの無意味さを説き、悠々自適に生きることを相手に勧める。しかし、相手はまだ憂いを抱いたままで、これまでの主張を受け入れない。そのため、また〈其七〉の「不能言」と同じ状態になる。

☆其十二・其十三・其十四《B》

三たび女性の嘆きが描かれる（其十二）。女性の嘆きを更に具体的にするために、女性が思っている男性が登場し（其十三）、その男性の嘆きも描かれる（其十四）。人生は元々困難なものであるという主張を導き出す役割を担う。

☆其十五・其十六・其十七《C》

其十・其十一の主張を受けて、初めこそ憂いを忘れようとする努力がなされるが（其十五）、その後（其十六・其十七）は人生の困難に対する憂いを素直に吐露するようになる。

☆其十八《D》

結論的役割。一貫して訴え続けてきた「人生の難に憂いを抱くのは無意味なこと」という主張が、己の若さに希望を抱くという楽観的な考えによって支えられて、全面的に表れて結ばれる。

このように「擬行路難」十八首は、「誰かの憂いを忘れさせるために歌う」という制作意図が見られ、作者の主張は「人生の難に憂いを抱くことなく、悠々と暮らそう」ということである。一方、作者が慰めようとしている相手の憂いは、Cの「人生の困難さを詠む」作品の中で語られている。第一の憂いが意を得られない憂いであり、第二の憂いが人生のはかなさに対する憂いである。そして、この相手の憂いが無意味なものだということを示すために、Bの「女性の嘆きを詠む」作品が使われている。人生とは元々困難なものだということをこの「女性の嘆きを詠む」ことで具体的に相手に提示しているのである。そのため、相手の人生に対する憂いが次第に深まって行くのに従って、女性の嘆きも深まっているのである。

では、この作者が呼びかけを行っている憂いを抱く人物とは誰なのだろうか。それは、憂いが直接表れているCの作品によって判断できる。Cの作品は「我」という言葉が多く見られ、人生の難に対する憂いが一人称で詠まれており、憂いを抱く人物の心情が直接に描かれている。そして、そこに表れる心情は作者鮑照自身のものと考えられるのである。このことは、既に指摘されていることであり[5]、Cの作品で人生の難を憂えている人物は作者鮑照自身と考えることが最も自然なのである。すると、憂いを抱く人物は作者鮑照であり、その人物の憂いを忘れさせようとしているのも作者鮑照となる。これは、どういうことなのか。恐らく、彼の心には、人生の難を憂えることは無意味なことと思う自分と、人生の難に対して憂いを抱いてしまう自分の両者が存在していたのだろう。そして、憂いは無意味なことと思う自分が、憂いを抱くもう一人の自分に呼びかけを

行い始めた。しかし、直接自分に言い聞かせるという設定は取らずに、自分の前に他の人物を置いて、その人物に呼びかけるという設定を用いて制作されたのではないだろうか。そう考えると、十八首の中に、人生の難に憂いを抱く作者と人生の難に憂いを抱くことは益のないことと主張する作者が登場することも矛盾しないであろう。心の中で葛藤する二つの思い、その葛藤が「擬行路難」という作品を生み出したのではないだろうか。

三

次に「擬行路難」十八首の制作年代について考えたい。この鮑照の「擬行路難」の制作年代について、青年期とする説と中年期とする二説があり、従来中国において〈其十八〉の第四句の「余は二十　弱冠の辰に當る」をとりあげて、二十歳とする説が有力であった。しかし、この説は「余は二十　弱冠の辰に當る」という句のみを論拠としており、決定的な説とは到底言えない。そのため、前掲論文において藤井氏は制作時期を二十歳とする説に疑問を呈し、三つの論拠を挙げて中年期とする説を立てている。

その論拠の第一点として、鮑照には「擬行路難」に見られるような七言の作品が他に全く見られないことを挙げている。七言の形式に対する情熱が短期間に消滅したとは考えにくいので、初期のものとするよりも、中年期以後を考える方が自然であるというのである。「擬行路難」十八首中には、全篇が七言から成るものが三作品有り、これらは偶数句押韻、換韻など七言押韻法の画期的な試みがなされている⑥。確かに、この種の七言詩は鮑照の他の作品には見られない。しかし、この新しい七言形式は鮑照の型破りな発想の一つとして生まれたものであり、特に鮑照が七言の形式に対して情熱を持っていたと考える必要はないと思われる。鮑照は型破りな発想や斬新なアイデアを己の詩に活かそうとしており⑦、この新しい七言詩も、七言詩が毎句押韻であった当時にあって、他の型破りな発想と同じように、一つの試みとして作られたのではないだろうか。こう考えると、特に鮑照が七言の形式に対して情熱を持っていたと考える必要はなく、初期か中年期かという判断をここに求めることはできないのである。

第二点は「擬行路難」には青年期の心情よりも中年期以後の人に見られやすい心情が多く見えるということで、それをもとに第三点の〈其十八〉自体が虚構ではないかということが導き出されている。つまり、第二点・第三点は、「擬行路難」十八首に中年期以降に見られやすい心情が多く見えるという事が、論拠となっているのである。しかし、ここで藤井氏は、十八首の内でどこが中年期以降に見られやすい心情なのか、明示されていないのでその論点がはっきりしない。そこで、中森氏が四十歳ころの作品だとする論拠を〈其六〉の内容に求めて具体的に述べておられるので、先に中森氏の説を検討してみる。中森氏は、まず「呉徳風、余冠英は（六）の『棄置罷官去、還家自休息』の句は、鮑照が臨川王劉義慶の下に國待郎として初めて出仕す

るのが元嘉十六年（四三九）二十六歳の時であるから、二十歳にして『罷官』などありえないとする」という説を取りあげている。そうして、呉徳風、余冠英両氏の説を更に発展させて、「棄置罷官去、還家自休息」の後に描かれている故郷での家族との生活の様子を引いて、「鮑照みずからの経験が色濃く投影されているようで、若年の作とは考えにくい」、「確かにここに描かれる家庭の姿には真に迫るものがあり、鮑照の實体験を寫したものかどうかの穿鑿は別にしても、二十歳の青年の手になるものとは思えない。」と述べている。しかし、そこに制作年代の論拠を、求めるのは不適切に思える。まず、呉徳風、余冠英が指摘する「官を罷めて」の句は〈其五〉の第十句の「且つ願はくは志を得て数々相就り」と〈其六〉の第四句の「安んぞ能く蹀躞して羽翼を垂れんや」との関連によって生じたと考えられる。〈其五〉では酒代を得るために、一時はしばしば小官についてもよいと考えたのだが、〈其六〉では小官に就くことによって上下関係を気にしながら暮らす生活は耐えられないと考えるに至って、「官を罷めて」という言葉が出てくるのである。であるから、この「官を罷めて」という言葉を鮑照自身の事に引き付けて考える必要はないように思える。次に、「官を罷めて」の後の故郷での家族との生活の様子は、家庭の中に幸せを見いだそうとする心情が見え、これが「鮑照みずからの経験が色濃く投影されているようだ」という中森氏の説を生んでいる。しかし、「擬行路難」十八首には人生の困難をより明確にするために、虚構が行われるという特徴がある。「女性の嘆きを詠む」作品や「嘆く相手に対して詠む」作品はもちろん虚構の内容であり、「人生の困難を詠む」作品にも、鮑照自身のことではなく、虚構ではないかと思われる部分が見られる。「官を罷めて」の後に見られる、家庭での生活に幸せを見いだすという考え方も、例えば、陶淵明の「和郭主簿二首」〈其一〉にも見られ[8]、無理に鮑照自身の実体験と考える必要はなく、人生の困難を歌う為の虚構ではないかと考えられるのである。したがって、「擬行路難」には中年期に見られやすい心情が多く見えるという藤井氏の説も、人生の困難を言うための虚構であって、無理に鮑照自身の心情としなくても良いように思われるのである。

こうして見てみると中年期の作とする藤井、中森両氏の説はどちらとも制作年代を特定するまでには至っていないようである。また一方の制作年代を二十歳とする説も、これまでに確固とした論拠が与えられている訳ではなく、どちらの説も論拠に乏しいとせざるを得ない。私としては、「擬行路難」十八首は一時の連作であり、若いころの作ではないかと考える。前述のごとく「擬行路難」は、憂いを抱く作者と、その憂いを忘れさせようとする作者が存在する。そして、憂いを忘れさせようとする作者の主張は十八首に一貫しており、〈其十八〉にそれが全面的に表れている。つまり、〈其十八〉に述べられていることは、鮑照自身の考えだと言えよう。とすると、〈其十八〉の第四句の「余は二十　弱冠の辰に当たり」という句が鮑照自身のこ

とを言っていると考えられる。また、この第四句の自分自身を表す自称としての「余」という言葉は、「擬行路難」十八首のなかで〈其十八〉に見られる一例だけであり、〈其十七〉までは、自称の言葉としては「我」が使われている。また鮑照の詩の中で「余」を自称として使っている例は一例もなく、ただ、「松柏篇」序に「余」を自称として使っている例が見られるだけである。「我」と「余」の用法の違いについて、伊東東涯の「操觚字訣」では、「我」が人に対して、相手に向かって言う場合に使われ、「余」は「吾」「予」などの言葉と同様に我が身だけのこととして使われるとある。では、「松柏篇」序に使われる「余」はどう使われているのか。

余患腳上気四十餘日。知舊先借傳玄集、以余病劇、遂見還。

（余　腳上の気を患ふこと四十餘日。知舊　先に傳玄集を借り、余の病の劇しきを以て、遂に還さる。）

このように、「松柏篇」の序で使われている「余」という言葉は自分自身だけのこととして使われているようであり、「操觚字訣」の説明と合うようである。「擬行路難」においても〈其十七〉までは、「君」に対する自称として「我」を使っていたのに対して、〈其十八〉では「君」に関係なく、我が身だけという意で「余」という言葉を使っているのではないだろうか。そうすると、「二十　弱冠の辰に当たり」という言葉は、鮑照自身の年齢を指していると考えられそうなのである。

現在まで、鮑照の「擬行路難」十八首の制作年代に対して、決定的な説は出されていなかった。私としては、十八首中に貫かれている作者の主張が〈其十八〉に全面的に表れており、〈其十八〉の第四句「余は二十　弱冠の辰に当たり」という言葉は鮑照自身の年齢を示すと考えられること、また、「余」という特別な言葉をこの句だけに用いていることから、「擬行路難」十八首の制作年代は中年期と考えるよりは、二十歳頃の若い時期の作品と考えるべきではないだろうかと思うのである。

四

本論文では鮑照の「擬行路難」十八首を一時の連作と考えて考察を進めてきた。そうして、鮑照がなぜ「擬行路難」を作ったのかということと、「擬行路難」の中で何を言おうとしているのかを探ってきた。結果として、鮑照は自分の心にわだかまる不遇への憤り、人生のままならぬことを忘れようとして、この「擬行路難」を作ったと思われる。鮑照自身は、寒人であるが故に不遇の人生を送らざるを得なかった。そのため、常に人生がままならぬものであることを痛感していた。鮑照にとって「擬行路難」はこれからも自分に降りかかるであろう厳しい人生の困難に対する憂いを払拭するための作品であったろう。また、設定の巧みさや七言詩の新しい形式が見られることは、自分の文

才を他に示すという意図もあったのだろう。

〈注〉

①藤井守「鮑照の擬行路難十八首について」（「支那學研究」三六）
向島成美「鮑照『擬行路難』について」（「東京教育大学文学部紀要」七七）

②中森健二「鮑照『擬行路難』の構成について」（「学林」一）

③藤井氏も前出の論文において十八首の分類を行っているのだが、中森氏が藤井氏の分類を基にしているので、本論文では藤井氏の分類について、直接言及しない。

④『鮑氏集』の現存するテキストについて、岡村繁氏の「『六朝詩集』に収められた『鮑氏集』について」（東北大学教養部紀要一）に詳しく論じられており、それによると、四部叢刊所収の孟斧季校宋本と漢魏六朝一百三家集所収の張溥本の二系統のテキストがある。そして、「擬行路難」には十八首と作るものと十九首と作るものがある。十九首に作るものは〈其十三〉を換韻するところで分けて二首としているが、内容的には全く同じであり、十八首の配列に異動は見られない。本論文では十八首は制作された時からこの順序であったとして論を進める。

⑤向島氏の前掲論文に、これらの句が鮑照自身の心情を表すということが詳しく論じられている。

⑥高木正一「七言詩押韻法の變遷について」（「立命館文学」一三一）参照

⑦鮑照の作品に型破りな発想が見られることは、鍾嶸の『詩品』の鮑照評に言及されている。

⑧陶淵明「和郭主簿」二首・其一（部分抜粋）
息交遊閑業、臥起弄書琴。園蔬有余滋、舊穀猶儲今。
營己良有極、過足非所欽。舂秔作美酒、酒熟吾自斟。
弱子戲我側、學語未成音。此事真復樂、聊用忘華簪。
（交りを息めて　閑業に遊び、臥起して書琴を弄す。園蔬は余滋有り、舊穀は猶ほ今に儲ふ。己を營むは良に極むる有り、足るに過ぐる　欽する所に非ず。秔を舂きて美酒を作り、酒熟せば吾自ら斟む。弱子は我が側に戲れ、語を學びて未だ音を成さず。此の事　真に復た楽し、聊か用て華簪を忘れん。）